

2022年度 入学試験問題

作文

(グローバル入試)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。QRコードシールをはる必要はありません。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



○次の文章は、第70回「全国小・中学校作文コンクール」（読売新聞社主催）（主催） 文部科学大臣賞受賞作品です。全体をよく読んで、あなたが感じたことを自由に書きなさい。字数は自由です。

日本語だけの世界に生まれていたら、もつと楽に生きられたかもしれないと思っていた。私が生まれたスイスは4か国語が公用語。私が住むチューリヒはドイツ語だ。私は何年たつてもドイツ語が話せなかった。「モニョモニョ。ゴニョゴニョ」。何を言っているのか全くわからない。

入学した小学校で、私がドイツ語を一言も話さないことが問題になった。個人レッスンを受けても、全く話せるようにはならなかった。

2年生の終わりに、私は学校から留年をすすめられた。もう1回2年生をするなんて、なんかやしい。だけど、両親は、「ぜひお願いします」と即答（すぐとう）したらしい。

次の日、母は図書館から30冊の絵本を借りてきた。

「友ちゃんはバカじゃないよ。単語の意味がわからないだけ。1日1冊ドイツ語の絵本を読んでいこうね」

その日から、私はドイツ語の絵本を声に出して読んだ。1行読むのに何回も辞書をひき、何分もかかった。単語を忘れる度に、母に意味を聞いた。毎日読み続けて、私の頭の中にドイツ語の言葉が残っていくのを感じ始めた。

しばらくたつたある日、学校で先生に「Kannst du das machen?（これをしてくれない）」とお願いされた。

その時、私の頭にある絵本のページが浮かんできた。先生が話した言葉と同じ文章が書いてあったのだ。耳にした文章が初めて頭の中に残った。初めて先生が話したことが理解できた瞬間（しんかん）だった。

私は、胸につかえていた物が流れていくのを感じた。言葉が理解できないまま大人になったらどうしよう。いつも心の片すみに不安の塊（かたまり）のかけらが座っていた。でも、先生の言葉を理解できた日にそのかけらは流れていき、心に希望の光が灯（とも）った。絶対に話せるようになれると確信した。その日からドイツ語の本を毎日、必死に読み続けた。読書量が増えると友達の話がどんどん聞き取れるようになった。意味がわからないときは、その場でできくと、すぐに教えてくれた。音がきれいに聞き取れるようになり、先生や友達に質問ができるようになる。私のドイツ語の世界は、どんどん広がっていった。

そして2年間で600冊以上のドイツ語の本を母と読み終えたとき、学校のドイツ語のテストで初めて百点を取ったのだ。嬉（うれ）しくて、嬉（うれ）しくて万歳（ばんざい）しながら家に帰った。

今年の7月。学校のドイツ語の作文コンクールで、私は優勝した。これも日本語で書き続けた日記と、山のように読んだ読書の成果だと思う。

簡単には話せるようにならない語学。でも、きつと努力すれば、みんな話せるようになるんだと思う。

早く日本に住みたいと思っていたけど、今はこちらの生活も悪くないと思う。努力した分だけ楽しいことが待っているとわかったから。英語もフランス語も話せるようになる、もつともつと新しい世界を見られるかもしれない。

『不安が確信に変わるとき』 スイス・チューリッヒ日本人学校補習校 6年 八木友美^{やぎともみ}」



